

次に、ブルハーヌツディーンの取り上げ方である。著者は、バヤズイトを、ティムールに無警戒であったためオスマン朝を崩壊に導いたとして非難する一方、ブルハーヌツディーンをティムールに果敢に抵抗した「アナトリアのトルコ人世界」(The Turks)の唯一の保護者(二五・五九頁)として称賛することに努めている。いきおい、この人物を反ティムール同盟の中心人物と捉え、ティムール出現後のアナトリア・シリア政治史はこの同盟を基調に展開していったと解釈されることになった。反ティムール同盟を評価したことは著者の功績の一つであるが、しかし、これをあまりにも重視しすぎると、事実を見誤らせる危険があるようにも思われる。

このように、重要な指摘も幾つかあって、十四世紀末から十五世紀初めにかけてのアナトリア・シリア史を志す者の、まず参照すべき文献であることに変わりはないものの、本書によって当該地域・時期の情勢が解明し得たとは、なお言えないのである。オスマン朝の将来にとって重要な意義を有するこの時期について、著者の見解を検証しつつ、今後さらに研究を進めていく必要があるだろう。

Yasar Yücel, *Timur'un Ortadoğu-Anadolu seferleri ve sonuçları* (1393-1402), Türk Tarih Kurumu Basımevi, Ankara, 1989. 152p.

ウィルヘルム・ハルプファス著

インドとヨーロッパ——理解のための試論

金沢 篤

The footprints of the elephant simply
obliterate the other footprints.⁽¹⁾

筆者は数年前本誌本欄でハルプファス博士の別の著作の紹介を行ったが、その際に一九八一年に刊行された本書のドイツ語オリジナルについても若干言及した。今回紹介するのは七年を経て、装いも新たに「新版」(New Edition)と名打って刊行されたその英語版である。著者が「新版」と言い、「英語版」と言わないのは旧稿に改訂が施され、前著に未収録の論文が数篇増補されているためである。その結果、前著では必ずしも明確ではなかった著者の考えが、それら追補された数篇によってかなり明確になった。すなわちある意味では著者自身による自作解説が含まれた『インドとヨーロッパ』の決定版と言っべきものが本書なのである。ドゥヨング博士の提言に即座に応えた形でもあるが、一人でも多くの人に読んでもらおうとの著者の

意向は、新版たる本書が英語で書かれ、しかも高価なハードカバーに加え、軽装の廉価版も同時に刊行されたことから伺える。このため前著の刊行を知りつつも、ドイツ語による高価な大著であることに後込みして敬して遠ざけていた読者も「ひとつ読んでみようか」という気になった筈である。

「東洋と西洋の対話」に類する著作の出版は洋の東西を問わず古今盛んであるが、本書もおおざっぱにはそうした著作のグループに含められる。だが著者が必ずしもそうした通り一遍の評価を喜ばないだろうことは著者自身のまえがきにも明らかであり、また「ヨーロッパ」と対比されているのが、「東洋」の「地域」「インド」に絞られていること、さらに本書に横溢するラディカルな批判精神等からも明らかであろう。なおドイツ人である著者が現在アメリカのインド学の一センターたるペンシルヴァニア大学のインド哲学専任教授であること、著者が学問的キャリアの出発点に選んだ題材が、ボン・サンスで知られるデカルトであったことを取えて指摘しておく必要があるだろうか。著者の人となりを見聞し、長年著者のインド学上の種々の業績に注目してきた筆者の如き者にとっては、著者のこれまでの論稿の一切が類書の追隨を許さぬ本書ただ一冊を産み出すためだけにあったのかとまで思われて、なお感慨が深

いのである。

著者は六〇〇頁を超える大部の本書において、個人がもつ「経験」というものについて様々な角度から検証しているように見える。インド思想がその根底にもつ様々な「経験」と、西洋人が古来育んできた様々なインド「経験」についての批判的考察が、本書の骨子をなしている。下記の目次からも明らか通り、まえがき、略語表、注記、索引等の学術的著作ならば必ず備えている部分を除いて、本書の全体は大きく三つの部分に分けられている。第一部は「ヨーロッパの自己理解の歴史におけるインド」と題され、相互に関連する十の論文が収められている。古来東洋に多大の関心を示してきたヨーロッパ人のインド理解とその証言の数々がかなり克明に検証されているのである。それに對して第二部は「インドの伝統とヨーロッパの現前」と題され、インド人の前に「外国」として現れてきたヨーロッパの存在をインド人がどのように受け止めてそれに処してきたかを具体的事例に即して検証するが、やはり全体を総括するエピローグを含む十の論文からなっている。第三部は「付録——説明と反省」と題されていることから明らかに、新版たる本書に新しく付加された部分で、旧版の刊行後に別々に発表された論稿と自著解説、及び旧版に対する反響を踏まえてなされた反省に基づく三つの論文

と今後の研究の展望を含む総括的論文よりなっている。おびただしい数の固有名詞に怖じ気づき、ただ著者の驚くべき博識に感心することしかなしえなかつた旧版の読者たちは、この第三部所収の論文に接することで、ようやくに冷静さを取り戻し、著者の考えや理解を始めてやや批判的に眺めることが可能となるに違いない。

自らの立っているところを弁えず、インドを神秘と奇跡が横行する謎めいた国に仕立て上げて少しも恥じることのない日本人の間でも、相変わらずフアッシュョンのようなインド旅行が盛んであるという。また束の間の「インド体験」をふりかざしたような旅行記や体験談がばっこしている。そうした状況にあるわが国の読者にこそ本書のようないわば硬派の「インド体験」記が読まれるべきと考える。

『インドとヨーロッパ』（新版）目次

まえがき

ドイツ語原版のまえがきよりの抜粋

インド名詞の転記と綴りに関する注記

I ヨーロッパの自己理解の歴史におけるインド

1 古典時代の哲学におけるインド観

批評と紹介 金沢

II インドの伝統とヨーロッパの現前

- 2 イスラムのインド哲学との出会い
- 3 宣教師のインド思想へのアプローチ
- 4 理神論、啓蒙思潮、及び初期インド学史
- 5 インドと今日のロマン主義批評
- 6 ヘーゲル
- 7 シェリングとショーペンハウエル⁽⁵⁾
- 8 ヘーゲル、ショーペンハウエル以降のインド解釈の展開
- 9 哲学史よりのインド除外について
- 10 予備的あとがき——二〇世紀の解釈学的状況

11 伝統的インド・ゼノロジー⁽⁶⁾

12 ラームモーハン・ロイと彼の解釈学的状況

13 ネオ・ヒンドウイズム、近代インドの伝統主義、及びヨーロッパの現前

14 近代のインド思想についての追観

15 ダルシャナ、アーンヴィークシキー、哲学

16 近代のヒンドウイズムにおける「哲学」概念の採用

17 伝統的ヒンドウイズムの自己理解におけるダルマ

18 近代のヒンドウイズムにおけるダルマの再解釈

19 サンスクリット・ドクソグラフィーとヒンドウイズムにおける伝統主義の構造

20 エピローグ

III 付録——説明と反省

21 インドと西洋の出会いにおける「経験」概念

22 インドと西洋の出会いにおける「包摂主義」と「寛容」⁽⁸⁾

23 インドと「比較」の手法⁽⁹⁾

24 要約と結論に代えて——ヨーロッパ、インド、及び「地球のヨーロッパ化」

略号——屢々引用される諸作品

注記

索引

本書の構成・概容は上記の目次より想像出来ると思われる。また旧版に対するものではあれ既に本格的な書評も少なからず発表されているので、全体にわたる論評は敢えて試みることをしない。誤記・誤植の類もほとんど目につかず、きわめて完成度の高い書物と言える。当然筆者としては本書の美点を並べ立てて、是非とも本書を直接読んで

らいたいと声高に繰り返せばいいことになる。だが、ただそれではあまりに能がないので、ここでは紙面の許す範囲内で、著者の驚くべき情熱の底にしっかりと見据えられている次の諸点（筆者の当面の関心に最も合致するものでもあるが）について少しく論及することにより、紹介の責を塞ぐつもりである。というのも筆者のうちには、インドはとにかくも恒にヒンドウイズムが席捲する特異な宗教国として立ち現れるとの見通しがあるからであるが、つまり、インドと他国の交渉を問題とする際には必ずといってよい程にその中心に据えられるヒンドウイズムのもつ「寛容」(tolerance, toleration)と「包摂主義」(inclusivism)の問題である。前者は言うまでもなくキリスト教精神の根付いたヨーロッパの思想史の上でも再三重要課題として論議されてきたところのものである。これは従来ヒンドウイズムの雑多性を糊塗する言葉として重宝され、わが国でも古くはたとえばガンジの「非暴力主義」等とからめて一部の思想家のプロパガンダに奉仕するものであった。また「ヒンドウイズム」と限定しないまでも、「宗教とはなべてかくあるべし」とのスローガンは、争いごとの絶えない非インド社会においては、「平和主義」の格好のお手本として大いに歓迎されさえたところのものであろう。近年わが国では日本学なるものが喧伝されており、また西洋での

イスラム受容を中核に据えたオリエンタリズム・ブームの煽りもかいま見ることが出来る。そしてそれらを、雑多なものが各々固有の地歩を確保してなおかつ相互に平和的に共存する、という途方もない野望を実現すべきものとしてあつた近代の歩みの中において批判的に受け止めていくためにも、この問題を真つ向から扱う本書は甚だ有益なものと云えるのである。

著者はこの問題を、新版において新たに追補された第二章「インドと西洋の出会いにおける「包摂主義」と「寛容」」(四〇三—四一八頁)において中心的に扱っている。ドイツの優れたインド学者として高名な故パウエル・ハッカー教授の所説に触発された著者はインド思想とインドと西洋の交渉史に現れる「包摂主義」と「寛容」に関わる問題の様々な様態を検証するのである。以下に著者の方法・論述のスタイルをも併せ紹介すべく、やや詳しく辿つてみた。

第二章は、ハッカー没後の一九八三年にハッカーの遺作「包摂主義」(Inklusivismus)を記念して公刊された『包摂主義——インド人の一思惟形式』(Inklusivismus. Eine indische Denkform)と題する論文集に収載された著者のドイツ語の論文「包摂主義と寛容」(“Inklusivismus” und “Toleranz”)を踏まえて書き下ろされたものである。

従来インド研究 (Indian research) において屢々とりざたされる「インド(人)の寛容」(Indian tolerance)と見なされてきたものの大半が、実は「包摂主義」のことである、とのハッカーの基本的見解を著者はその出発点とする。「包摂主義」という言葉を一九五七年に発表した論稿の中で初めて用い、一九七九年に没するまで屢々その語を用いて論文を展開してきたハッカーであるが、その理解の内実を年代的推移を踏まえて検証し(これを著者は chronological review と呼ぶ)、他の様々な見解と共に辿ることを通じて浮き彫りにする。その手際は執拗なまでに周到にして精緻であり、スリリングなまでに鮮やかである。

著者によれば、ハッカーは寛容を「実践的寛容」(practical tolerance)と「教理的寛容」(doctrinal tolerance)とに大別し、さらに「実践的寛容」にも、「支配者によって制度化されたものに対して、個人の実践に関わる私的寛容(private tolerance)」を区別する。インドウイズムにおいて見られる「教理的寛容」も、屢々その代表のようなものとして遇されるヴェーダーンタの絶対的一元論に基づくそれを「寛容」と呼ぶことは適當ではなく、むしろそれは「寛容と不寛容の特殊な混合体」であり、インドの思想に顕著な「宗教的自己主張」の一形態と看做すべきであ

る。そして(トゥールシーダースの)ヴィシュヌ教や(シヤークタ派の)シヴァ教のものに代表されるそれを「包摂主義」と看做すべきである。近代のヒンドウイズムの思想家たちによって用いられるに到った「寛容」概念は、インドの伝統に根差したものでなく、むしろ一八世紀のヨーロッパの「理神論」(deism)に起源をもつものである。「寛容」「不寛容」という概念は無益なスローガンであり、ヒンドウイズムの描写には適切なものではない、といったように、著者はハッカーの見解を紹介していく。

次いで著者は一九六四年に発表されたハッカーの論文に論及を進める。そこにおいてもハッカーは「包摂主義」と「寛容」の関係について議論を展開している。ハッカーの論調は年とともに一段とラディカルになり、近代における「寛容」という概念の使用はヒンドウイズムの一体性という虚構を主張する機能を果たした、さらに「包摂主義」の実践は本質的に「寛容」とは異なっており、それは論争や思想の促進のための典型的なインド的手法であるとまで言うに到った、と言うのである。ハッカーはインド思想上ジャヤンタ・パッタに見られるような「非包摂主義的な」教理的寛容を認めつつも、それを極例外的なものと考え、ヴェーダーンタの不二論の強力な系譜は本質的に「包摂主義的」(inclusivistic)であった、と主張していることを著

者は紹介している。

次いで、著者は一九七〇年に配布され、一九七八年に発表されたハッカーの「残存せる伝統的ヒンドウイズムとネオ・ヒンドウイズムの諸相」(Aspects of Neo-Hinduism as Contrasted with Surviving Traditional Hinduism)に言及を進め、そこにおいて示されるハッカーの「包摂主義」についての「実際には異宗派に属するものを自分自身の宗教のうちに包摂すること」という概念規定を紹介する。そしてトゥールシーダースの場合はその顕著な例であり、この方法は自身の外的環境より自身が劣っていると感ずる宗教グループによって特に用いられ、ヴィヴェーカーナンダやラーダークリシュナン等のネオ・ヒンドウイズムを奉ずる者たちによっても採用されたものである、とのハッカーの見解を伝えている。さらに著者は、ハッカーが一九七八年ミュンスター大学で最後に行った講義の中でまたもこの「包摂主義」の問題を取り上げ、従来の考えを展開させて「包摂主義」と「階層主義」(stratualism)の融合に言及した、と指摘している。また一九七八年に公刊された自らの『論文集』(Kleine Schriften)のまえがきで「ヨーロッパ人にとつて寛容と見えたものが、ほとんど恒に包摂主義であった」と記し、「包摂主義とは本質的に排他的なまでにインド的現象である」との過激な表現が没後刊行

された論稿の中に見いだされる、としている。

以上のようにハッカーの「寛容」と「包摂主義」についての一連の見解を簡単に紹介した後、著者はその見解に異を唱えるインド学者を始めとする様々な学者の見解、カント等の西洋の哲学者の見解、ネオ・ヒンドウイズムの思想家、さらにはシャンカラ等の伝統的なヒンドウイズムの思想家の姿勢、ギリシア哲学からキリスト教の伝統における西洋のそれを丹念に分析している。何と著者は学者たるハッカーの論述に対して、カントやヘーゲル等の大哲学者の著作に対してと同様に、あるいはまたシャンカラやヴィジュニヤーナヴィイクシユや竜樹等のインド思想史上の巨匠のそれに対してと同様に鋭く分析のメスを入れるのである。

「寛容」に代えてのハッカーの「包摂主義」概念は、単に「客観的な」研究の記述的カテゴリーや道具に留まるものではなく、また文献学的、歴史的「正当性」の基準のみによって測れるものではない等と述べ、「彼（ハッカー）は「純粹なインド学者」ではない。また彼は「客観的な」研究の言葉でのみ語っているのではない。彼もまた今なお系統中のインドとヨーロッパの出会いと対話に、個人的にも系統的にも深く参与せる者である。」と、本章の最後を結ぶのである。

今は著者のこの結語の当否の詮議は無用であらう。著者

の論述のプロセスは複雑微妙であり、ある意味では煩瑣とまで言い得る。なお冒頭に引いた英文は第二章中のものであるが、著者によってさりげなく置かれた「象の足跡は容易に他の足跡を消す」と解し得るこうした言葉のうちに我々は「客観的な」学者のあるべき姿勢が暗黙裡に語られていることを理解するのである。だが、「客観的な」「純粹なインド学者」など、果たしてどこに在るだろうか？ 同一性と差異、同じものと見えたもの間に明確な差異があること、取り敢えずこの差異を徹底して洗い出すことに、学者としての著者の眼差しが注がれているように思われる。専門のインド学者にして始めて可能な一見トリイヴィアルな分析のうちに真に有意な知見がもたらされる。細部に分け入っても決して全体の俯瞰を忘れ去ることがない、空疎なデコトミーの所産とは無縁の優れた知的達成が、本書であると言えるのである。

以上で筆者の紹介は終わる。もとより杜撰の極みとの誇りは免れまいが、曲がりなりにも著者ハルプフアス博士の本書による達成のすばらしさとその力量と方法と論述のスタイルの内実の一端でも紹介できているとすれば、筆者の喜びはそれに尽きるのである。構想の規模と分析の緻密さの点では較ぶべきもないが、本書に先行する類似の試みと言える故グラウゼナップ博士の好著『インドによって育ま

れたドイツ思想家』(Das *Indienbild* deutscher Denker, 1960) が今や日本語で読める状況にある。本書もまた見事に邦訳されて、書店の店頭を飾る日の遠からぬことを祈念して本論評の結びとしたい。(一九九〇・一・一六)

註

- (1) 本書、四一五頁七一八行。
- (2) 拙稿「批評と紹介——ウィルヘルム・ハルプファス著『クマールラとシャンカラ』」『東洋学報』六六卷一・二号(一九八七年一月)、〇六五—〇七四頁を併せ参照された。
- (3) Cf. Review by J. W. de Jong, *IJ*, 27-3, 1984, pp. 217-219.
- (4) Cf. W. Halbfass, *Descartes' Frange nach der Existenz der Welt : Untersuchungen über die cartesianische Denkpraxis und Metaphysik*, Meisenheim/Glan, 1968.
- (5) シェリングについて、本書では大幅に加筆された。
- (6) 「ゼノロジー」(xenology)とは聞き慣れぬ言葉だが、著者によつて本書「五〇七頁注」によつて、"a term for attitudes towards, and conceptualizations of, foreigners"と説明されている。

(7) 旧版第一七章が本書では、第一七、一八章となっている。

(8) 旧版第一九章、本文後出ドイツ語論文「包摂主義と寛容」を参照。

(9) Cf. W. Halbfass, "India and the comparative method", *PhEW*, 35-1, 1985, pp. 3-15.

(10) 註(3)、「前掲拙稿」〇七三頁註(2)参照。ただしそのReviewerの一人であり、かつ本書の出版にも大きく寄与したと言われるH. Alper氏が本書の刊行を待たずに急逝されたことはかえすがえすも遺憾である。氏の編集により先年刊行されたハードカヴァーの *Understanding Mantras*, (New York, 1989)に衝撃を受けた者として、心より哀悼の意を表したい。

(11) ヘルムート・フォン・グラーゼナップ著『東洋の意味——ドイツ思想家のインド観』(大河内了義訳、法蔵館、昭和五八年)がその邦訳書である。本書の理解を深める意味でも、是非一読されたい。

(Wilhelm Halbfass, *India and Europe : An Essay in Understanding*, State University of New York Press, New York, 1988, xvi, 604pp.)